

近世・近代社会経済資料（古文書）デジタルアーカイブについて

- (1) このデジタルアーカイブは、東京大学経済学図書館が所蔵する近世・近代社会経済資料のうち、古文書類について順次デジタル化をすすめているものです。
- (2) このデジタルアーカイブの利用に際しては「[東京大学経済学図書館電子資料利用規則](#)」に同意したものとみなされます。
- (3) 印刷物など他媒体への使用については、東京大学経済学図書館までお問合せください。
- (4) 画像は白黒です。文書原本の朱書や裏書、端裏書、裏継目印、前欠・中欠・後欠の部分、丁間に挿入された文書や脱落した付箋については、画像内に「朱書」「裏書」「端裏書」「裏継目印」「前欠」「中欠」「後欠」「挿入文書」「脱落付箋」などの置き札を写し込んであります。また、原本が破損し撮影が不可能な場合や、白紙が何枚も続く場合には、「以下破損につき撮影不能」、「以下〇丁白紙につき撮影省略」などのターゲットで明示してあります。
- (5) 画像の撮影には文字が視認できるよう十分な注意を払っていますが、資料の欠損、変色、褪色等の劣化や、ノド部分の状態によっては、原本の文字が全て写っていないものがあります。これらについては資料の原形を保ちつつ、出来る限りの範囲で撮影したものとして了解下さい。写りの悪い文書については、東京大学経済学部資料室にて、所定の手続きにより原本の閲覧をお願いします。
- (6) 文字間のコントラストの差が大きなものについては、視認性を高めるために、照明を調整して複数回撮影しています。この場合は、同一の丁の画像が複数枚連続して表示されます。
- (7) 本アーカイブに関する質問等については、東京大学経済学部資料室までお問い合わせ下さい。
- (8) 本デジタルアーカイブの一部は、独立行政法人日本学術振興会平成 25 年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号 258061 の交付を受けて作成しています。

70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80

扇谷
東光山事記

寺社役所

・英勝院様御年譜

文政十一年写

・同御牌銘等并御本堂等之御棟札写（一八二八）

・英勝寺御代々御住持職事記

東大・経済

5 Z

1923

扇谷

東光山事記

寺社役所



光東谷

ISSIDO
1900
東京大学図書



39248

扇谷

東光山事記

寺社後所





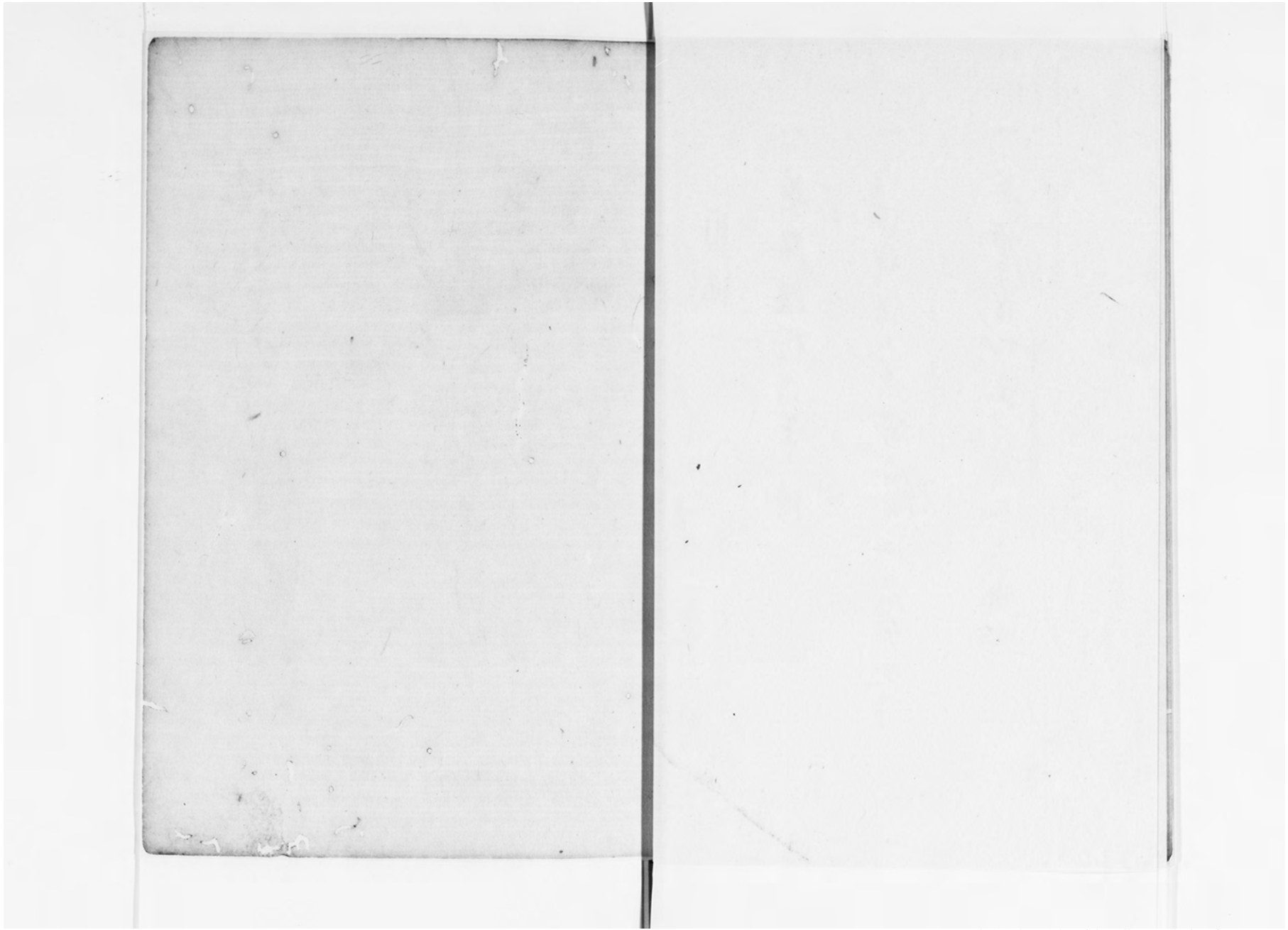
此書文政十一年子八月終書之
中寫畢在右書之一冊終之
三卷一冊之終書之

目錄

一 英陽院板書年譜

一 日吉牌銘本英陽院書年譜

一 英陽寺法代々所任持職事記

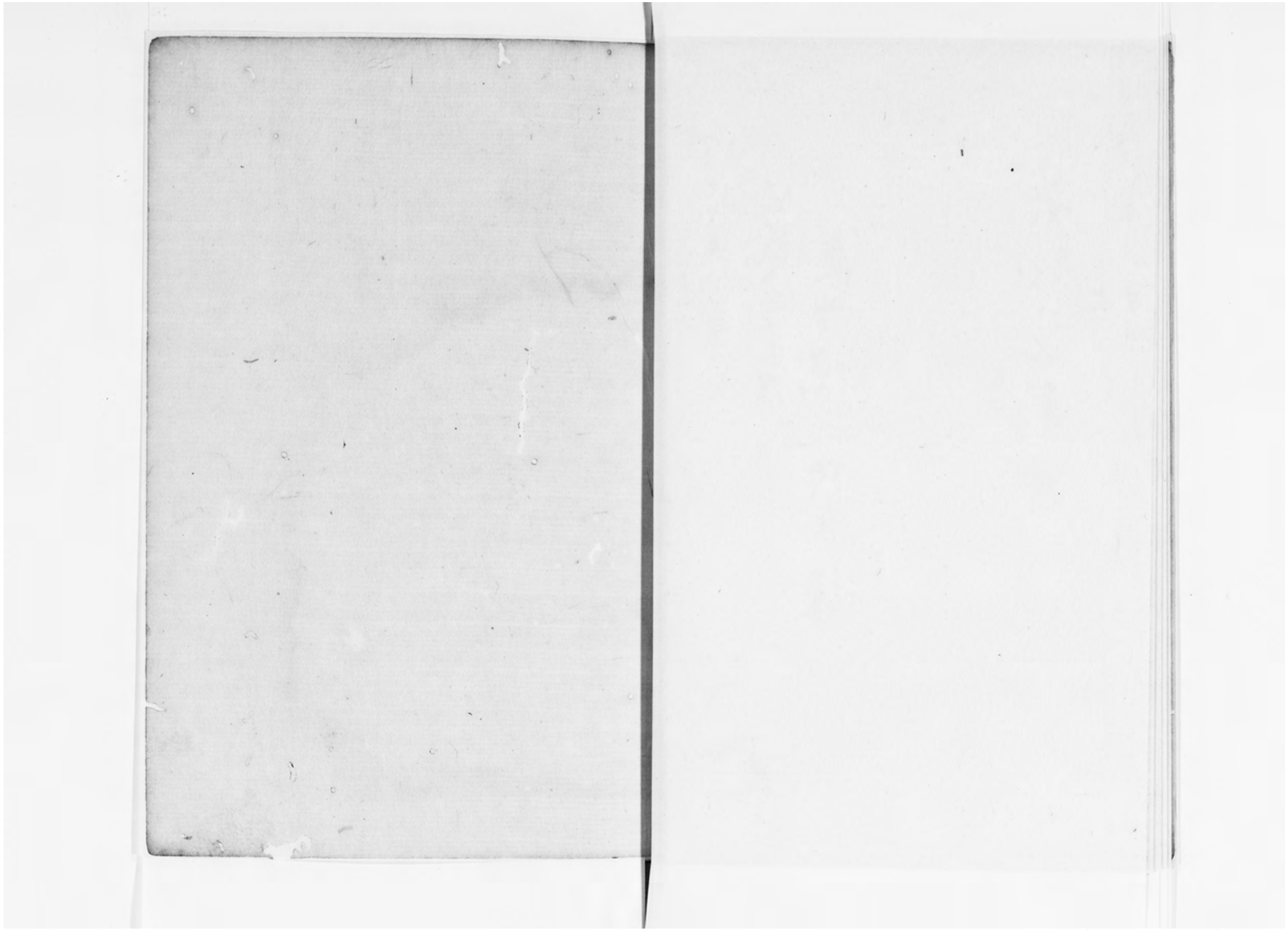


御覧の上書

公儀と善出候馬。

英勝院様御年譜

英勝院年譜



英勝院年譜

英勝院禪尼とて田新六郎康資の未
女として幼くして重正の妹なり天正六
年十一月九日安房國小湊に生れ幼く
して八言能く行ふためきし時
録

天正十八年八月

神祖武蔵王は入國ありし時より
関東舊家の徳士はあつて集りて
小幡権入道の子孫多かりしを
免れしものも少く京師ありし
梶いりし十三代よりして
梶いりし十三代よりして

小幡女は小幡をうけつては例
石はしるべき事なり小幡
は新に食禄ありては賜ふ

慶長五年閏の月陣の時梶と
なりし小幡の子孫はははは
と信いふ事なり

かては一戦は御勝利ありふく地と
勝山と改めし勢は又信を蒙り
名成勝とありたけしといふ

十二年正月二日

神祖孫府より一書に姫君とみ
まより松姫君とみまはま生のち

仙臺少将より一姫君とみまはま生のち
は契弱ありといふ

十六年松姫君四とみまはま生のち
二月よりふく世とみまはま生のち
孫府の華陽院とみまはま生のち
小孫より御法名と一照院殿圓芳功

心清女と申すは勝もく大は法華宗とて
有るをわきみたりにあやとてい
たてふがむいふあやとて澤七ふふあり
又香電は善れいあは清いまりと二百
石の田と華陽流ふ寄附とて

七月

神祖の台命あり頼君

水戸中納言頼房卿

と以て

勝の某子になり候ふはさあは元め君と
おくれもてあつて元能くもていふ
ことを候ふむいふふりていふ

八月二日見重正頼君のたまふていふせ
おふは某の子は實宗十一とふりて言ふと

祢江戸を立し祢家替とて所い孫
府よりされては小姓とて勝とて
さうし命しむるはま中より
生長とて

十六年二月

神祖京よりを流しとて勝吉と

推りしは信とて

四月二條の寺に池田三郎の輝政

の女とてしむるはま中より

此輝政の女とてしむるはま中より

神祖に所い孫とてはま中より

宗とてはま中より

十七年三月十七日

台徳院殿江戸より孫右衛門中平と云い

と朱印宗十之を本より一の

神祖は台命ふりくは佐と江戸系

ありむき二百名の加恩と賜_はわ姓と

侍とむ

十九年大坂陣めとくも勝るに

のりくは佐は

え和元年夏陣あり亦は佐は

二年四月十七日

神祖かくれと孫いくは孫繁と云い

て念佛と昧ふと英勝院福元と孫は

その後江戸より代官所より所々
至りてたすい時

台徳院殿小僧より書

九年

台徳院殿大御所より書

大猷院殿は代々より勢弱い後継り

は顧みられし者より前より

可憐他よりやういふ様

神祖のたむ侍より

大猷院殿と竹千代君より書

世にまゝをいふはよくいふ

たゞしとて思ふは

ひし部也

寛永八年十一月二十日新府卿第四の女
縁婚と書いし禪尼許すといひ
御ふをりて明正年五月十日

將軍家には養女とせしむる大室と
稱す

十年十二月五日大姫君松平筑前守と
御一姫嫺の嫁あり

十一年四月又新府卿の女小良姫と
若くは姫とせしむる大室と稱す

六月鑑余河ふさ宮家所屬の女あり
乃藩入道と書置ありて菩提寺と

創立をいふことありしに二月十二日

乃ち廿八日五十九文の地を多まつた

十二年弱新子結本少く資不足を以て

新地と賜ひしに八段元の地を以て

建う段元より六時く還るなりは後

より其地源よりとて供ふ所なりと云

石宅より此寺武家諸法度より

しとて仮名つきの寺と賜ひしに

十二年十一月廿二日麻呂の精舎新し

東光山英勝寺といふところなりは

此所より住持となりし名と清岡と稱

増する天竺上人等師多し

十四年十一月廿日英勝寺に二百名法
お指國之浦池子村より寄附を致し
二月廿日御朱下法施文をたふ
十八年九月廿日初より福尼病休を言
うは

將軍家より時より使を下りて尋ね

終ふ廿五日に殊に中根を改定し
以て法尋ねり黄金二千両を
廿六日上使に寄附を留時重なり
日局を付るに後法を召集する
を縁より終ふ。

十月四日小資宗法に法一あり日永祥

尼社枕席をとりて志を
 空に託せり
 解
 是より阿彌豊後守君秋より命を
 らね

十一月四日未刻

將軍家祿元の宅一御成あり病牀丹
波きて尋々せうい等も数条の書付を

法懷より再出し、終に法華つうたふに
又黄蘗二十板殿子二十卷とあるより

十九年五月廿六

竹子代君は年二五ふりて天壽院殿の
鐘より渡御せしより祿元元年一始て
御成あり奉藏に数端を賜ふ

八月十四日 禪尼が病急なりとて

將軍家又侍成有り病牀におつゝ尋ね

させ給ふ其の上意は懇切なりとて不斗

かゝ禪尼にうづ申上り給ひ目く上使を

當まつりて法惠を乞ふれり中め

若君様におもはせ給ひ侍成あり侍候嫌

ありぬい多しと給ふ法指子を見せ給へり

あつたぐり有難きより申上り給ひをり

こやあり目増は給ふ長をさす多しとて

たと一日毎にやうにも給ふやうにさす

させ給ひ侍候はくもいさつ給ふを

給ふ却て病軀の煩ひ多しとて一と

つやあきゑは庵わさやうふ此付頼房のや
小候さうれ資宗ふも侍望しきりしや
かくてあの間し福りやねいゝ後言治宗
とのゝゝ生けりやとも尋せりやふ
もやあねもやさかゝけと背へはあね
小ねよをさういゝとなりねて陸奥守あふ

とも百て厚うとさきあり又信をねさるゝ
こやあゝゝとて資宗ふとのゝゝと三意と信
ゝとねる

八月廿二日夜福尼けあいまゝに及ぬ
上岡も達とゝゝの御成あゝゝかゝゝとん
ゝゝゝもあねのゝゝゝとては名代ゝ

於彦といふ女をつゝいふは堀田加賀守正
盛和子伊豆守信綱阿部を後守右衛門尉
馬守重信の女といふはうはうといふを朱子
宗龍とて上りて師とて久志を古く
助をいふはけい地とていふは
とていふともいふはけい地とていふは
とていふともいふはけい地とていふは

刻といふ字は尊号六十五年未だといふ
去は法彌を英勝院清空禪定尼といふ

今日

將軍家能清徳は多味を禁とてけい

法放尊法やめといふはけいといふ也

廿二日夕資宗といふは山東市正といふ也

體に從いてかへく英揚寺より廿四
日能喚上寺後の山中不續より増える
業。東寺上人を導師と次

廿七日井上清兵衛正以海英揚寺より
はし清音曲典南鑑百枚を賜ふ
廿八日上使中根を彼寺に書し以て得た



逝去せしつゝ賢宗万回精進を
より清鑑の上を法義の

九月十日阿部を後守忠秋と上使し
水戸家一都よりこれ後氏平生の志願
より英揚寺勅諭のこゝに法義ある
るより又寺内も清厨料小混しむると

なるきやとてふらう百廿石とくつらう
池子村四百廿石此と全くちまたを
妻福寺のふとも境内とふらう
台所のむねを供つらふけとて賢家も
おふとをふり侍坐してお聴きとて又
賢家の宅とて上使とて内田信濃守

正信とては烈の台布と供つらふ
廿日新府卿とて國心と供い鎌倉一と
て由はつらふおふと茶田の儀式ある
増上寺住持とて上人守師とて賢家
賢家とておふと
僧侶百餘とて英徳寺とて集とて新徳と

潜懷をくたうに執前掌おる昌仙をわめ
忠宗嫡子也とす先宗おのの英孫とす
系統を解尾法紀傳のあかきとくた
法隆代の徳大寺家人とて使と遣ひ
吾典とあはれて

廿一日池田常力長治とて使とて鎌倉へ

つゝいれ英勝寺領四百廿石法所判物と
下さる

廿二日東房に父子やい資宗とて中
わされ法看經の間に於て穆尼の事
て法慈親あり頗る前漢より及ん
たり此等穆尼の事とて

神祖の御筆と帖と

此巻後二九所宮一納めさせ給ふといふ

若君様ハ飛鳥井原移り合七冊と

了戸つゝぬ

二十年八月廿三日 祿元一周忌多きによりて

頼房卿光國公と始々侍從頼重刑部大輔

頼之播磨守教安以爲宗ふれぬ種々

より子と上人と守師と千部讀經の

進言と行ふ此日上使吉良公使中家

公と英勝寺とつゝふれ

仙洞

後水尾帝

宸翰の題署

英勝寺三字

と賜つた

又老女伊豆井といふ法音曲、菊鏡百枚と

多き

正保之年八月廿三日
二回忌の法事とて
~~~~~  
とて

其の年二月廿日  
~~~~~  
勅所とれ

の倫旨と賜ふ

英暉院殿梵蓮社行譽任勝無礙光阿
清吟大和尚

西曆六五年 月 日 亥時 年
寺榮

同治石牌表墓所銘

一步疆場と左田縣境を以て前進せしむるを
修復

英勝院
英勝院
英勝院

山門 所奉堂匾棟札
後發中願寺奉進

英勝院橫所位牌

同所不牌素書所銘

一、五種據、左、因、極、深、多、及、奉、進、小、乃、其、家、分
 修復

棟札

奉敬立相州英勝寺山門從四位下侍從
源賴重朝臣寬永二十癸未歲八月十六

日

佛殿

額

寶珠殿

良恕法親王筆

棟札

上棟相摸國鎌倉扇谷英勝寺寬永十二
柔兆困敦十一月二十三日太田禪尼英
勝院長譽清春建住持玉峯清因二品親
王良純書之

梁牌銘

寺名英勝山號東光煩惱利劍苦海慈航
寬永二十年八月日正三位權中納言源

朝臣賴房立

九方

惟茲檀越新開道場晨誦夜讀云祈久長

住持玉峯清因

右方

位牌之表

顯妣太田太主母英勝院長譽清春禪定尼神位

孝子源賴房奉祀

位牌之裏

夫人姓源氏太田諱勝天正六年戊寅某
月某日生年十三侍東照公生一女四歲

而夫因養池田輝政女後嫁之伊達忠宗
慶長十五年庚戌七月奉命養水戸侯威
公為子撫育至篤公薨後為號英勝院寬
永十九年壬午八月二十三日卒年六十

此女
太主母
六尺五寸
六尺五寸
六尺五寸

六尺五寸
六尺五寸
六尺五寸

位牌之內 江阿彌陀經細字三節籠 源義公筆

石牌

太夫人源姓太田氏諱勝父田康資母藤
氏遠山丹波守直景女也太夫人筭歲始
事東照大神君侍枕席被恩寵誕一女早
夭神君愍其無賴命水戸侯頼房為其准
母神君薨後薙髮為尼號英勝院時々筭

謁台德公逮大猷公治世眷遇特加常侍
營中談舊事寬永十一年六月賜鎌倉扇
谷數百弓地建淨刹號英勝寺奉命養頼
房女為比丘尼號玉峯清因侍持此寺乃
是太夫人高祖左衛門大夫道灌之舊蹤
所謂源氏山也十五年十一月賜三浦池

子村地為寺田十八年秋太夫人寢疾十一月四日大猷公親臨問之時嗣君尚幼然御駕來視恩光之隆為世美談明年八月二十三日遂屬纊時年六十五大猷公哀惜賻儀鄭重其後依賴房請而大猷公執奏賜宸筆額扁寺且賜常紫衣宜首可

謂身後之榮施之不朽者也孝孫源光因立

所任職事記

鎌倉英勝寺住持職事記

英勝院太夫人

天正六年戊寅十一月九日 太夫人

生于安房州小湊諱勝太田新六郎源

守藤原直景女○康資源三位頼政十

一代後胤太田左衛門大夫持資或作

入道道灌

四世孫

十八年庚寅年始十三侍

神君有寵

慶長十二年丁未正月朔誕一女四歲

天

華駿明華陽院法名
圓芳功心號一照院

十五年庚戌 台命以姪備中守資宗

爲養子

十六年辛亥四月 台命養池田三左

衛門尉源輝政女

外孫 神君

爲子後適松

平陸奧守藤原忠宗初許嫁所生女早

夭故有是 命

元和二年丙辰依 台命爲鶴千代君

准母

鶴千代者威公幼名先是太夫人
喪一女 神君愍其無依遂育此

命

四月

神君薨薙髮爲尼號英勝院

寬永十一年甲戌四月應

大猷公命養威公女爲比丘尼

清因和尚

是也
見下

五月九日登城義公從太夫人

始謁

大猷公于大奧

義公時
年七歲

六月乞爲其菩提創立一寺于相模鎌

倉之扇谷事達台聽賜扇谷地若干

建淨刹號東光山英勝寺開念佛三昧

之道場

道灌舊宅所謂源氏山也○住持之事見後

十八年辛巳秋寢疾宮崎備前守時重

依台命來在太夫人之邸承候焉

九月二十五日使上使申根壹岐守

正盛賜金三千兩

十月四日備中守資宗被召營中有

命晝夜侍疾且上報差劇

十一月四日

大猷公親臨問之恩命隆渥賜黃金

二十枚并卷物三十

十九年壬午五月二十一日

嚴有公親臨問疾賜卷物

雖公尚幼禮遇及茲

八月十四日疾革

大猷公再臨視之。恩眷備至。威公

迎謁陸奧守忠宗備中守資宗伺候

二十三^日壽六十有五而逝法諱清春■

雅號長譽其院曰英勝故名寺神君

時拜謁 台德公逮 大猷公治世眷
遇特加常侍管中談舊事 大猷公聞

計哀 惜焉是夜靈柩發江戶翌日至鎌倉中

山東市正信正依 威公命趣之備中

守資宗亦至

九月二十日修葬儀于鎌倉由井濱並

執行法會增上寺業譽上人爲導師讀

經千部 威公與 義公俱至于法席

考台命曰英勝院之佛事追善雖幕府之所當修乃因賴房卿所請見委之也賴房卿父子宜有會之云々

備中守資宗嫡子左馬

今資次來

二十年癸未八月修一回忌法會業譽

上人爲導師 威公 義公受 台命

復與俱來會

明年秋兩公復因三回忌法會以來至十三回忌亦

威公會之 松平右京大夫賴重松平刑部大

輔賴元松平播磨守賴隆暨備中守資

宗來此時 上使吉良若狹守義冬奉

幕府所賜之

後水尾帝

宸筆額如鎌倉以授 威公 公并受之

紀伊公所藏英勝院年譜云二十三日
公受勅額於此一說二十日歸府一說
矛盾他無所攷
今姑從年譜

初祖清因和尚

寬永五年戊辰十一月九日和尚生

于武州江戸山手郎幼名小良水戸中
納言源威公女母

藤原氏興正寺
權僧正昭玄女

十一年甲戌四月奉

大猷公命爲英勝院太夫人養女薨

洊稱沙彌

十三年丙子十一月二十三日台命

任英勝寺開山住持

十五年戊寅十一月 台命給寺田三

百石于同州三浦郡池子村之地且免

寺地稅并篋畝

一曰十四年丁丑十一月給之

十九年壬午八月啓行入寺御齋食著

袈裟戒名清因道號玉峯禪尼號雄譽

自太夫人逝
堅持僧律

是月二十七日遣 上使井上清兵衛

正次于鎌倉賜賻銀一百枚

一曰二
百枚

九月十四日 上使阿部豐後守忠秋

宣齋賴房卿所請

敕額之事

一曰太夫人請之

乃被 執奏于

仙洞御所且寺領他領阡陌相錯仍今以

池子村四百二十石全施入于寺又併

壽福寺地之山賜之俾入於境內之

命

以山下視寺中也然資宗亦有幕府之旨之威公之邸在側并聽恩命

二十一日遣上使池田帶力長治

治一

作賢

于鎌倉賜押

御直判寺領四百二

十石之券書

慶安元年戊子三月十四日 上使酒

井讚岐守忠勝傳 命于 威公賜

敕願所并常紫衣

綸旨

寬文元年辛丑七月 台命趣于水戶

省 威公之疾

十一年辛亥正月十一日登城賀新

正今朝幕府遣廣鋪番頭於威公之第
以迎駕焉是禮始于大猷公之時

其待和乃先謁
尚如此

高巖院太夫人優命引於上殿且賜以對坐而設庶羞備三獻

之禮錫爵
返上焉
獻一東一卷饗訖奉謁

嚴有公饗禮同前○所從女僧及士各有賜食
獻一東一

卷

延寶元年癸丑五月台命會威公

十三回忌法筵于水戶

元祿八年乙亥十二月二十三日辭職

退居寺中別室號玉峯院

寶永四年丁亥十一月九日有八十祝

壽

正德五年乙未正月有米牋祝壽

享保二年丁酉六月八日示寂于寺享

年九十牌銘玉峯院滿蓮社雄譽即向

清因和尚葬此

二世清山和尚

寬文十一年辛亥八月朔 和尚生于

常州水戶

小名鍋水戶中納言源義公
女實家臣酒井周防守源忠

恒女○忠恒者 忠恒後改忠治

義公妹夫也

延寶六年戊午九月發水戶至江戶

十月二日 台命爲 義公養女即日

薙染稱松譽清山爲 姑母清因和尚

法嗣

元祿八年乙亥十二月二十三日 台

命任英勝寺住持

九年丙子正月二十三日始謁

常憲公及

淨光院太夫人

十三年庚辰九月二十五日復謁見

常憲公于 肅公第 時 常憲公
臨小石川第

十五年壬午九月二十六日奉謁

桂昌院太夫人于 八重姬君御守殿

時 太夫人
御駕親臨 賜紗綾十卷

十六年癸未二月七日復謁

淨光院太夫人于八重姫君御守殿

時奉迎太夫人於茲有賜物

享保七年壬寅六月二十七日示寂于

此時年五十二牌銘馨香院負蓮社松

譽月窓清山和尚葬于寺

三世清玉和尚

正德二年壬辰八月二十三日和尚

生于讃州高松名金松平讃岐守源
賴豐女母山本氏

享保三年戊戌四月二十七日至于江

戶

五月十一日入英勝寺爲 清山和尚
法嗣薙染稱沙彌戒名清玉道號永壽
號常譽

七年壬寅八月二十七日召水戶家臣

山邊野主水正義達於 營中閣老安

藤對馬守信友傳 命住持此寺

清山和尚

寂因有
是命

寶曆十三年癸未六月八日示寂于寺

年五十二牌銘天華院照蓮社常譽完

阿心光清玉和尚華此

自是
增補

幻響音院

寶曆元年辛未閏六月六日生于譜

高松

名久松平讃岐守頼恭
女母荒川氏實宮武氏

五年癸亥五月二十六日水戸 良公

請 幕府而遣鎌倉英勝寺爲常譽第

子

六月七日入于寺

七年丁丑五月朔入于寺年七歲葬于

此牌銘幻響院覺譽猶如清夢大童女

四世清薰和尚

寶曆八年戊寅十月二十七日生于武州

江戸目白第

水戸源良公女實大炊頭超
多女名美奈初名銀母龜井

信濃守源
茲胤女

十三年癸未六月二日

台命爲良公

養女爲清玉和尚法嗣

八日清玉和尚示寂

七月二十五日薙染稱沙彌戒清薰道號

玉聖號興譽

八月八日台命爲英勝寺住持

明和五年戊子八月六日示寂年十一牌

銘玉聖院香蓮社映譽稱阿清薰和尚葬

于寺

五世清月和尚

明和元年甲申九月八日生於武州江

駒篋郎

名金水戸源良公五女母俊科院夫人所生母深津氏名清田良公薨後

爲尼號慧照院來鎌倉居于寺

七年庚寅十月二十七日 台命爲英勝

寺住持

十二月五日入于寺薨深稱沙彌戒名清

月道號戒光號鮮譽

文化十四年丁丑二月八日示寂年五十

四牌銘戒光院明蓮社鮮譽淨阿勝海涼

心清月和尚葬于寺

六世清吟和尚

文化四年丁卯七月十七日生于武州

戸吹上郎

水戸源武公女名勝實大學頭
頼愼女母水戸文公女名雅

十一月 台命爲 武公爲 清月和尚

法嗣

二十五日移于小石川郎

九年壬申十月二十三日入于寺

十一月朔薙染稱沙彌戒名清吟道號英

暉號行譽

十四年丁丑二月八日 清月和尚示寂

五月十七日 台命爲英勝寺住持

